

歴史に遊ぶ

『神話の世界から

神武天皇の誕生』

古事記をひも解く

令和元年九月二十五日

鎌倉楽しむ会

清藤 孝

はじめに

平成天皇は三十一年四月三十日を以って譲位され太上天皇（上皇）となり、平成の時代は終わりを告げ、新元号「令和」の幕開けとなりました。

新天皇は、令和元年五月一日「剣璽等承継の儀」に臨まれ、「初代神武天皇」から連綿と継承され、第一二六代令和天皇としてご即位なされました。

そして、令和元年十月二十二日（火）には、国内外の招待客の列席のもとに「令和天皇」の日本国の象徴として「即位礼正殿の儀」が・宮殿「松の間」で、平安時代絵巻のご装束で厳かに繰り広げられます。

さらには、十一月十四日（月・祝）には第四十代天武天皇時代から始まったと文献に見られる、天皇が即位のち初めて天照大御神をはじめ天地地祇に奉り、自らも食す祭り、天皇一世一度の最大の祭り「大嘗祭」が、東御苑に於いて行なわれます。

儀式は悠紀殿・主基殿を設け、最初に十四日の夕刻、天皇は悠紀殿に臨み三時間に及ぶ式典のなかで、大神と聖別された初穂を共食

され、皇祖神と豊穰を保証する秘儀を行い、そして翌日の未明には、主基殿に臨まれ同じように式典は執り行われます。

また、この時悠紀殿・主基殿に献上される聖別された新穀に携わる生産農業関係者は大変名誉なこととなり励みとなっているということです。

第四十代天武天皇について

大化の改新（645）を成し遂げた中大兄皇子（天智天皇）の弟君とされる大海人皇子（おあまのみこ）が第四十代天武天皇に即位され、中国を見習った律令国家がなされていく。

また、天武天皇は「古事記」編纂の発端となる次のような言葉を発せられている

「聞くところによれば、諸家が伝えている帝紀（皇室の系譜）や本辞（古い伝承）は、すでに正実を違えて多くの虚偽を加えている。今、その誤りを改めなければ、いく年もしないうちに大切な主旨が滅びてしまうだろう。帝紀や本辞は、我が国の起源由来と先祖が国土経営を重ねてきた大本である。ゆえに帝紀を撰録し、旧辞を究め明らかにして、偽を削

り真実を定めて、後世に伝えたい」

そこで、側近の舎人で「稗田阿礼（ひえだのあれ）」に帝紀と本辞を読み習わせ、太安万侶（おおのやすまろ）によって撰録され、和銅五年（713）全三巻が完成し、第四三代元明天皇に献上されました。

古事記の上巻（かみつまき）は、天地初発（あめつちはじめ）から鵜葦草葦不合命（うがかふきあえずのみこと）まで、

中巻（なかつまき）は初代神武天皇から第一五代応神天皇まで

下巻（しもつまき）は第一六代仁徳天皇から第三三代推古天皇までが書き留められています。

『古事記の上巻』

大国主神の

「国創り」から「国譲り」

伊邪那岐命（いざなぎのみこと）と伊邪那美命（いざなみのみこと）の「神生み」の最後に生まれたのが天照大御神、月読命、須佐之男命（すさのおにみこと）であったが、須佐之男

命は数々の乱行の末に高天原を追われることになります。地上界に降り立ったのが出雲国の肥の河の川上であった。

川上には足名椎（あしなづち）、手名椎（てなづち）の老夫婦と娘・櫛名田比売（くしなだひめ）とが住んでいたものの、毎年、八咫遠呂智（やまたのおろち・大蛇）に他の娘は食われ残ったのは櫛名田比売ひとりであった。

須佐之男命は櫛名田比売との嫁取りを約束し、強い酒を入れた八つの酒樽を用意し、大蛇に吞ませ、大蛇が眠った隙に神剣を振るい退治してしまう。

退治した尾から現れたのが「草那芸（草薙くさなぎ）の剣で、これを天照大御神に献上されます。この剣は、皇室の三種の神器の一つになっていきます。

須佐之男命は櫛名田比売と結ばれて須賀宮を造り、葦原中国（あしはらのなかつくに）の開拓を始めますが、子神の代から葦原中国を任せ根の国・堅州国（ねのくに）にかたすのくに）行ってしまう。

そして、須佐之男命から数えて六代目の大穴牟遲神（おおなむちのかみ）は兄達の八十神からいじめられ、須佐之男命の住む根の国・

堅州国（ねのくに）にかたすのくに）行き、そこで、須佐之男命の娘・須勢理毘売（すせりびめ）と結婚し、数々の試練を乗り越えて、須佐之男命から「大国主神」の名前をいただき葦原中国をさらに発展させていきます

「大国主神」は、少彦名神（すくなひこなのかみ）や大物主神（おものぬしのかみ）に助けられ、子神・事代主命（ことしろぬしのみこと）、建御名方神（たけみなかたのかみ）の協力で、この国を美しい豊葦原（とよあしはら）の瑞穂（みずほ）の国に造り上げていった。

* * *

一方、天照大御神は地上の繁栄を眺め見て、葦原中国（あしはらのなかつくに）は我が子孫が治めるべきと考え、高天原の神議り（かむばかり）の結果、大国主神のもとに「国譲り（くにゆずり）」の交渉にアメノホヒノカミ、アメノワカヒコらを遣わしたが、務めをはたすことがかなわず、最後に遣わされるのが建御雷神（たけみかずちのかみ）で、経津主神（ふつぬしのかみ）が副えられた。

建御雷神は、伊名佐之浜（現在の出雲大社の西一キロの稲狭の浜）に降り立ち十掬剣（とつかのつるぎ）を浪の穂に逆さに突き立て、

その切っ先に胡坐（あぐら）を組んで大国主神に「神問わす（かむとわす）」

大国主神は子神・事代主命（ことしろぬしのみこと）、建御名方神（たけみなかたのかみ）に返答を託します。

事代主命は国譲りを即答し、建御名方神は、力比べを申し出たが、敵わないため、諏訪の地に来て、諏訪の神に納まることを許され国譲りを了承する。

大国主神は高天原に届くような大きなお社（やしろ）を建ててくれることを条件に、すべての「国譲り」を了承する。

天孫降臨

建御雷神から葦原中国の「国譲り」の報告を受けた天照大御神は、子神の「天忍穗耳命（あめのおしほみみのみこと）」に天降って治めるようにします。

しかし天忍穗耳命は身支度に時間がかかっている間に子供が生まれます。名は「邇邇芸命（にぎのみこと）」です。天忍穗耳命は、天照大御神に「この御子をお降してください。」と申し上げ、了承されます。

まさに「天孫」の降臨となります。

天照大御神は邇邇芸命に五柱の神を従わせ、さらに、天照大御神を天石戸から招き出した「鏡」「八尺の勾玉（やさかのまがたま）」「草那芸の剣」の三種の神器に、その時、協力した三柱の神を副え、邇邇芸命には、「この鏡は、わたしの御魂（みたま）として大切に斎き（いつき）祀りなさい」と言われました。天孫が高天原から天降ろうとすると、国つ神の猿田毘古神（さるたびこのかみ）が、先導を務め、日向国（南九州）の高千穂の峰に案内され、この地に降臨なされ、邇邇芸命はここに宮を造り住まいようになります。

このはなのさくやびめ
木花之佐久夜毘売との出逢い

地上に降り立った邇邇芸命は、笠沙の岬で美しい乙女に出逢いました。山神・大山津見神（おおやまつみのかみ）の娘で、桜に象徴される木花之佐久夜毘売です。

さっそく結婚を申し込みますと、父親の山神はたいへん喜んで、姉の石長毘売（いしながびめ）も共に二人の娘を天孫に嫁がせます。

ところが石長毘売は醜かったので、木花之佐久夜毘売のみ娶って返してしまいます。

父親の神は嘆かれて、「石長毘売は永遠を保証し、木花之佐久夜毘売は繁栄を保証するために嫁がせたのだ。今、石長毘売を返してよこしたので、天つ神の御子の寿命は、桜の花のようにほかないものになるだろう」と宣言されました。

以後、天皇の寿命に限りがあることになったということです。

ほどなくして、木花之佐久夜毘売は身籠り、天孫と山神との間に三柱の御子神生まれます。御名は

火照命（ほてりのみこと）Ⅱ海幸彦

火須勢理命（ほすせりのみこと）

火遠理命（ほおりのみこと）Ⅱ山幸彦

です。

海幸彦と山幸彦

海幸彦は漁夫、山幸彦は猟師です。二人はお互いの獲物をとる道具を交換して猟・漁に出るのですが、山幸彦は兄の大事な釣り針を失くしてしまいます。兄の海幸彦に事情を説

明し、代わりの釣り針を用意したのですが、兄は赦さず、戻せと責め立てます。

山幸彦は泣きながら海辺にいたところ、塩椎神（しおつちのかみ）が来て助けてくれます。

山幸彦を目が詰まった竹籠の小舟を作って、海津見神（わたつみのかみ）の宮殿に送り出してくれました。

そして、海津見神は、天つ神の御子である山幸彦を歓迎し、娘の豊玉毘売（とよたまびめ）と結婚させました。

あつという間に三年がたつてしまいました。山幸彦は目的を思い出し、海津見神にお願いしたら、海中の魚を呼び集め、鯛から釣り針を取り出してくれました。

海津見神は、兄の海幸彦へ釣り針を返すときの呪文を山幸彦に授け、鮫（ワニ）に乗せて一日のうちに地上に送り届けました。

返された海幸彦は次第に貧しくなり、山幸彦に仕えるようになり、その子孫は宮廷を護衛する隼人（はやと）の人たちとなつていきます。

うがやふきあえずのみこと
鵜葦草葦不合命の誕生

しばらくして、豊玉毘売は山幸彦の日向国にやってきました。

「わたくしは子を身籠って、今、産み月となりました。」と言って、海辺に、鵜の羽で屋根を葺いた産屋を造りました。

しかし、まだ屋根が出来上がらないうちに御子が生まれそうになったので、豊玉毘売は、夫の山幸彦にお願いしました。それは、「出産するとき、本国の元の姿になって子を産みます。出産のときには絶対見ないでください」ということでした。

しかし、山幸彦は本来の姿、現実の姿があらわになったものを覗いてしまいます。

覗かれた豊玉毘売は「恥ずかしいこと」として海神（わたつみ）の国に帰ってしまいました。

生まれた御子は「天津日高日子波限建鵜草葺不合命（あまつひこひこなぎさたけうがやふきあえずのみこと）」と名づけられました。しかし、豊玉毘売は、妹の玉依毘売（たよりびめ）に御子の養育を任せようと海神（わたつみ）の国から日向国に送り出します。

玉依毘売は鵜草葺不合命を育て上げます。成長した鵜草葺不合命は、叔母にあた

る玉依毘売を娶られ、四柱（よつはしら）の御子が生まれます。

一、五瀬命（いつせのみこと）

二、稻氷命（いなひのみこと）

三、御毛沼命（みけぬのみこと）

四、豊御毛沼命（とよみけぬのみこと）

またの名を神倭伊波礼毘古命（かむやま

といわれびこのみこと）

この御子のうち、稻氷命（いなひのみこと）は母の国である海原へ入り、御毛沼命（みけぬのみこと）は波頭（なみがしら）を踏んで常夜国（とこよのくに）へと渡って行きます。

そして、神倭伊波礼毘古命は、兄神・五瀬命と日向国から大和を目指し、荒ぶる神を従いながら軍勢進め、大和畝火（うねび）の白檮原宮（かしはらのみや）において即位され、神武天皇として天下を治めることとなりました。

むすび

今から千三百年前に書かれた「古事記」の上巻を概説してきましたが、殆ど「神話」の世界です。壮大な抒情詩のようですが、現代

でも身近に感じる処が多々あり、神話の世界に引き込まれていきます。

須佐之男命から始まり、子孫が大切に引継ぎ出雲の国を豊葦原の瑞穂の豊かな国に作り、今もその風景がつづいているようです。

また、神倭伊波礼毘古命の父神・鵜草葺不合命が生まれた処と伝わる日南の鵜戸神宮の素晴らしい景勝地は、どうして？九州・出雲・大和を繋ぐ愛とスペクタクルの神話となったのか、ロマンが広がっています。

令和元年は、皇紀二六七九年にあたります。天照大御神の下された「天壤無窮（てんじょうむきゆう）の神勅」に守られ、神話の時代を経て、神武天皇のご即位から天皇中心の我が国の歴史は世界に誇り得るものであります。お読みいただきありがとうございます。

【完】

参考文献

古事記・日本書紀 西東者
地図で読む古事記・日本書紀 PHP 文庫
とんでもなく面白い古事記 PHP 文庫古眠
れない程面白い古事記 王様文庫
古事記75の神社と神様の物語 王様文庫
古事記の読み方 ワック
神社検定テキスト…神社のいろは・神社のいろは（Ⅱ）・神社のおへそ・万葉集と神話・古語拾遺集・日本の祭り 扶桑社
出雲大社ほか各神社のホームページ

天地の始まりとともに現れた神々

ことあまつかみ
現れては消えた別天つ神

- 1、天御中主神 (アメノミハカヌシノカミ)
- 2、高御産巢日神 (タカムスビノカミ)
- 3、神産巢日神 (カミムスビノカミ)
- 4、宇摩志阿斯訶備比古遲神 (ウマシアシカビヒコジノカミ)
- 5、天之常立神 (アメノトコダチノカミ)

かみよななよ
イザナキ・イザナミにいたる神代七代

- 1、^{くにのとこだちのかみ}国之常立神
- 2、^{とよくもののかみ}豊雲野神
- 3、^{うひちにのかみ}宇比地邇神・^{すひちにのかみ}須比地邇神
- 4、^{つのぐいのかみ}角杙神・^{いくぐいのかみ}活杙神
- 5、^{おほとのぢのかみ}意富斗能地神・^{おほとのべのかみ}大斗之弁神
- 6、^{おもだるのかみ}於母陀流神・^{あやかしかねのかみ}阿夜訶志古泥神
- 7、^{いざなきのかみ}伊耶那岐神・^{いざなみのかみ}伊耶那美神

いざなぎのかみ いざなみのかみ
伊耶那岐神・伊耶那美神の国生み

- | | | | | | | | |
|--------------|-----|----|----|----|-----|----|-----|
| ⑧ | ⑦ | ⑥ | ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| 豊秋津島
(本州) | 佐渡島 | 対馬 | 壱岐 | 九州 | 隠岐島 | 四国 | 淡路島 |

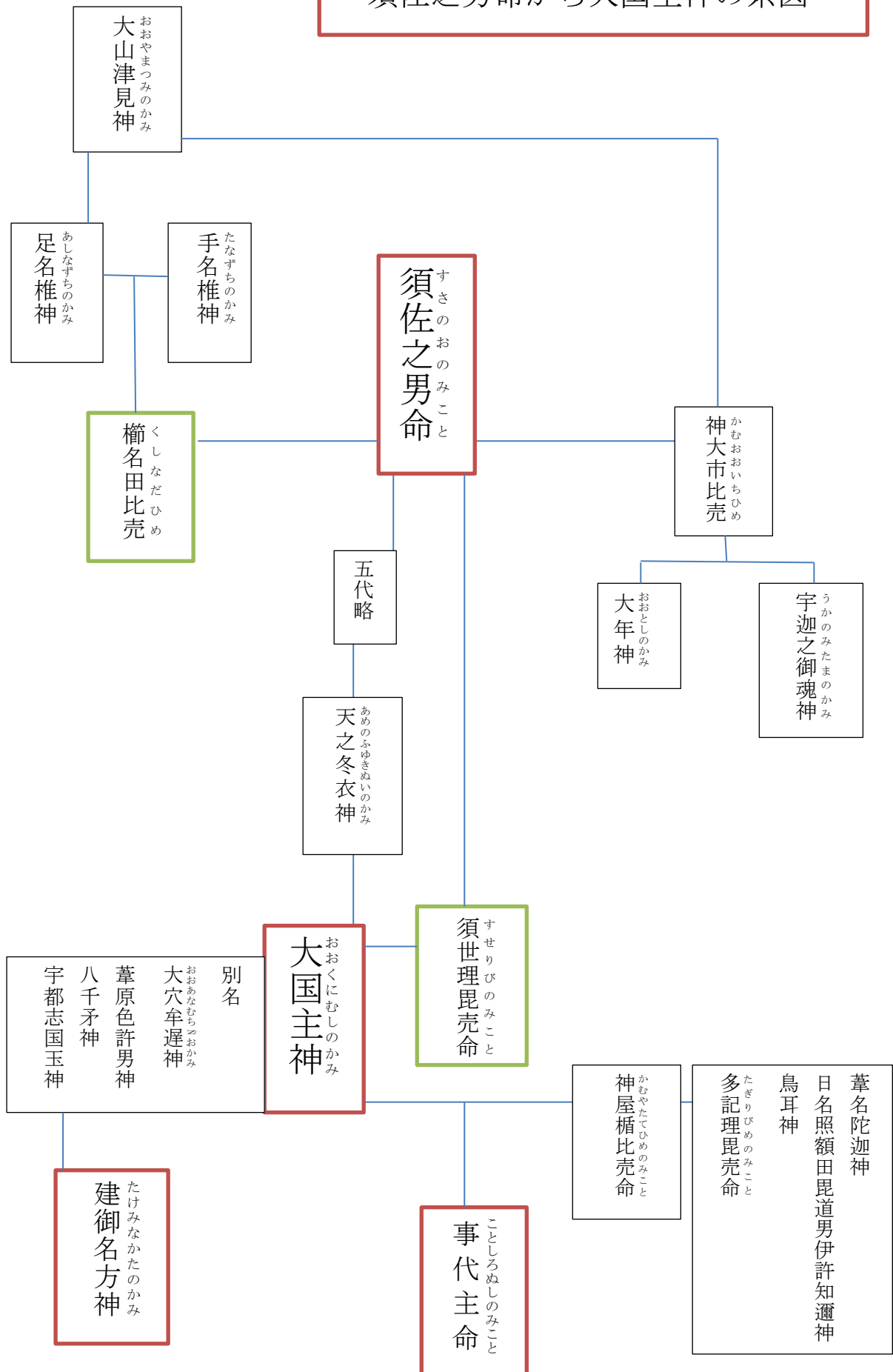
いざなぎのかみ いざなみのかみ
伊耶那岐神・伊耶那美神の子神が現れる順序

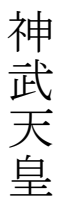
- | | | | | | | | | | | | | | |
|---|-------|-----|-----|--|--|--|-----|---|--|------|------|-------|---|
| ⑭ | ⑬ | ⑫ | ⑪ | ⑩ | ⑨ | ⑧ | ⑦ | ⑥ | ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| 火の神
(火之迦具土神)
<small>ひのかぐつちのかみ</small> | 食べ物の神 | 船の神 | 野の神 | 山の神
(大山津見神)
<small>おおやまつみのかみ</small> | 木の神
(久久能智神)
<small>くくのちのかみ</small> | 風の神
(志那都比古神)
<small>しなつひこのかみ</small> | 水の神 | 河口の神
(速秋津日子神)
<small>はやあきつひこのかみ</small> | 海の神
(大綿津見神)
<small>おおわたつみのかみ</small> | 家屋の神 | 戸口の神 | 石や土の神 | 大事をなしおえる神
(大事忍男神)
<small>おおことおしおのかみ</small> |

↑
*伊耶那美神は、火の神（火之迦具土神）を生んだことにより、黄泉の国に旅立ちます。その時、亡骸から沢山の神を生んでいきます。

夫の伊耶那岐神は悲しみのあまり火の神火之迦具土神を十束剣で切り裂きます。その十束剣から滴り落ちる血からも数々の神が生まれ、天照大御神と大国主神との「国譲り」の時に活躍する「建御雷神」も生まれ出るのです。

須佐之男命から大国主神の系図





天孫降臨（邇邇芸命）にお供した神々

- ① 天児屋命（中臣氏の祖神・宮廷の祭祀を統括）
あめのこやねのみこと
- ② 布刀玉命（忌部氏の祖神・中臣氏の補佐）
ふとたまのみこと
- ③ 天宇受売命（猿女氏の祖神・祭祀の場の芸能）
あめのうずめのみこと
- ④ 伊斯許理度売命（鏡作りの祖神）
いしこりどめのみこと
- ⑤ 玉祖命（玉作りの祖神）
たまのやのみこと
- ⑥ 常世思金神
とこよのおもいかねのみこと
- ⑦ 手力男神
たちからおのみこと
- ⑧ 天石門別神
あめのいわとわけのみこと

《天孫降臨に際しての天照大御神の神勅》

邇邇芸命に「この鏡はわたしの御魂として大切に祀りなさい」

思金神には「神の朝廷の政事をしっかりと行いなさい」

＊日本書紀の「天壤無窮」の神勅＊

・・・葦原の瑞穂の国は、わが子孫が王となるべき地である。

行って治めるがよい。天地にあるかぎり永遠に栄えるだろう」

三種の神器は

八尺の勾玉（やさかのまがたま）

鏡―天照大御神の（御魂）

草那芸劍（くさなぎのつるぎ）

天孫降臨の先導役

国つ神の

“猿田毘古神”
さるたびこのかみ

現世では「道の祖」
おやとして

道祖神になっています。